53

愛知の結核医療史補遺

山田英雄[1]・山内一信[2]・青木国雄[3]

［目的］不治の病であった結核の疾病史は二十世紀の近代医学の一大ドラマであった。本報告では愛知の結核医療史を顧み、先達の残したかずかずの偉業および各療養施設の興亡を追跡し、その評価と今後の展望を試みた。

［方法ならびに検討事項］①愛知における結核の疫学史（一九〇〇～二〇〇〇）、②愛知における結核予防対策の進展、③結核との闘いを展開した先達とその業績、④愛知県における結核療養施設とその時代的変遷、⑤再興感染症としての結核の現状とその対策

［成績ならびに考察］愛知の結核の疫学および予防対策史については「愛知の結核」（監修小川朝吉、愛知県衛生部、昭和三十七年刊）に詳述されているが、愛知の結核死亡率は大正七年まで増勢を続け、女子が優勢であったが、その後減少に転じ、昭和五年に再び増勢に転じ、昭和七年には性比が逆転し、そのまま戦争によるピークへと進んだ。愛知最初の結核療養所である日本赤十字社愛知支部八事療養所（現在の名古屋第二赤十字病院）は大正三年十二月一日に開院した。大正三年三月には愛知結核予防会が発足し愛知県の結核予防のため二十五年に亙る活発な活動を展開した（愛知県結核予防史、坂　正夫編、昭和十三年七月刊）。愛知県最初の公立結核療養所「名古屋市八事療養所」が大正十一年四月一日に開院した。大正八年の結核予防法の施行に伴い結核予防対策の急進展がみられ愛知県健康相談所（昭和十年、三ヶ所）、巡回看護婦の設置（昭和六年）、結核療養施設の開所（①公立結核療養所豊橋市立高山病院（昭和十年十二月）、②県立大府荘（昭和十四年六月）、③名古屋市療養所梅森光風園（昭和十五年一月）等が行われた。愛知県における結核予防対策は戦後名大第一内科を中心として強力な活動があり、また昭和二十六年厚生省より衛生部長として小川朝吉氏を迎え協力のもとに大きな成果をあげ愛知の結核死、有病率の急激な減少、そしてその後の結核病床計

画立案に大きな貢献があった。結核病学の推進には名古屋大学医学部の諸先輩の偉大な貢献があり、本報告では「名古屋大学第一内科六研の歩み」（山本正彦編、昭和六十一年三月）に拠り報告する。大正十二年に始まった日本結核病学会も名古屋で今日まで五回開催され、結核の克服に果たした愛知の結核医の指導的役割を回顧する。治療薬の進歩と予防体系の確立により愛知の結核死亡率は昭和二十六年以降急激に減少するが我国の結核死亡率はまだ欧米の低水準には達しておらず、結核根絶を目指す我国の方針もまだ目標が立っていない。そして結核の今日的課題として再興感染症としての結核への新たな戦略が始まっており、平成十年患者の高齢化、院内感染の続発、薬剤耐性結核の出現への対策などへの本格的取り組みが始まっており、愛知の現状についても報告する。結核療養施設の時代的変遷については国立療養所中部病院および国立療養所東名古屋病院の例を中心に紹介する。

（国立療養所東名古屋病院）[1]
（名古屋大学医学部医療情報部）[2]
（愛知県がんセンター）[3]